

日本は肩書社会と揶揄されることもあるように、人間を地位で評価する傾向にある。同様に事物については国際や世界という接辞を重視し、最近、人気のある代表は世界遺産である。国際連合の専門機関の認定であるから肩書としては十分で、全国各地が登録に奔走している。自然環境や歴史遺産を保全する本来の目的も幾分かはあるにしても、本音は観光資源としてのお墨付きの獲得である。

ところが集客の数字を調査してみると、以外にも期待を裏切る結果である。登録された年度の訪問客数を一〇〇とし、以後の動静を計算してみると、文化遺産である法隆寺は九年後に六〇、姫路城は九年後に七一、厳島神社は八年後に七七、熊野古道は七年後に八四、石見銀山は六年後に七二と減少している。自然遺産も屋久島は八年後に九〇、知床半島は六年後に六八となり、富士山の登山客数も二年後の今年は五八と低調である。

もちろん、白川郷は七年後に二〇〇、琉球王朝の遺跡は四年後に一一六など、肩書効果を発揮している世界遺産もあるが、有名になって千客万来を期待すると、大半は思惑のようにはなっていないのが現実である。その一方、山形県鶴岡市の加茂水族館は観客が年間一〇万人以下になり閉館寸前になったが、館長以下が眼前の海中から採集したクラゲを展示したところ、新館の建設効果もあって直近の一年で八〇万人突破となった。

これは例外で、日本国民は自身で価値を発見することが苦手である。写楽の版画は現在一枚一〇〇万円以上するが、寛政年間に短期しか活躍しなかったため、明治時代まで忘却されていた。大正時代にドイツの美術史家が写楽をレンブラント、ベラスケスとともに世界三大肖像画家と評価した結果、突然の人気となったが、すでに大半が外国に流出しており、七〇〇枚余の本物のうち国内には二〇〇枚弱しか存在しない。

奈良の興福寺は明治初期の神仏分離令で寺領を放棄させられ、寺院を維持できないほどの苦境となった。そこで五重塔と三重塔を売却しようとしたところ、現在価格で数十万円の値段となった。買主は焼却して金属のみを回収する思惑であったが、周囲の住民が延焼を理由に反対したため存続することになった。後年、両者とも国宝に指定されている。革命時期の特殊事情とはいえ、価値を見抜けなかった典型である。この傾向は現在にも継続している。昨今、和食が世界で流行しているが、契機は七〇年代にアメリカが国民の食事内容を見直し、雑穀、野菜、魚介を中心とする江戸時代の日本庶民の食事を最高と評価したことである。その結果、和食が人気となり、現在、海外には日本国内の二倍以上に相当する九万店近い日本料理レストランが存在する。しかし、その時期から日本では肉食が急増し、最近では魚介の消費を上回っている。

この性向は明治時代の文明開化の名残のようであるが、和魂洋才という言葉があるように、祖先は単純に西欧文明を導入してきたわけではない。日本のノーベル賞受賞者の人数がアジアで突出しているのは、フィジックスを物理、ユニバースを宇宙など、西欧文明を日本の精神で理解できるように翻案した効果であるといわれる。それは科学のみではなく、ベースボールを野球、オペラを歌劇など文化についても同様である。

ところが最近、ハロウィンのように、そのまま輸入し展開する商業主義の洋魂洋才が隆盛になる一方、日本旅館や公衆浴場のように、日本国民が敬遠しつつある文化を外国の人々が評価しはじめている。国際観光客数が増加することは、経済利益以上に、相互理解という効果をもたらすことが重要であるが、そのためにも足元にある原石を自身で発見して宝石にする才覚が必要である。